

修士論文（要旨）

2023年7月

病棟看護師が捉える高齢心不全患者が在宅で心不全コントロールを行う上での問題と対応

指導 渡辺 修一郎 教授

国際学術研究科
国際学術専攻
老年学学位プログラム
221J5011
宮本 大樹

Master's Thesis (Abstract)
July 2023

Ward Nurses' Perceptions of Problems and Solutions for Elderly Heart Failure
Patients to Control Heart Failure at Home

Daiki Miyamoto
221J5011
Master of Arts Program in Gerontology
Master's Program in International Studies
International Graduate School of Advanced Studies
J.F.Oberlin University
Thesis Supervisor : Shuichiro Watanabe

目次

第1章 緒言	1
1.1 我が国の高齢者人口の増加と心不全の動向、心不全パンデミックの襲来	1
1.2 心不全予防の重要性	1
1.3 心不全による再入院の動向とその影響、セルフケアの重要性	1
1.4 先行研究から捉えた心不全高齢者が自己管理する上での課題	2
1.5 先行研究から捉えた心不全高齢者に関わる看護師の対応	3
1.6 研究目的	3
第2章 研究方法	3
2.1 研究対象者	3
2.2 調査方法	4
2.3 分析方法	4
2.4 倫理的配慮	4
第3章 結果	5
3.1 研究対象者の概要	5
3.2 生成されたコアカテゴリー、カテゴリー、サブカテゴリー、コード	5
3.3 問題に対するカテゴリーの詳細	5
3.4 問題に対する対応のカテゴリーの詳細	8
3.5 問題に対する対応と対応が語られなかった問題	11
第4章 考察	12
4.1 在宅で心不全コントロールをする上での問題	12
4.2 問題に対する看護師の対応	13
4.3 本研究で対応策の語られなかった問題の検討	17
4.4 研究の限界と今後の課題	17
第5章 結論	18

謝辞

参考文献

表 1、表 2、表 3、表 4

図 1

第1章 緒言

2021年の我が国の65歳以上の死因別死亡率は、悪性新生物に次いで心疾患が第2位であり²⁾、心疾患（高血圧性を除く）の中でも心不全は全体の約40%と、最も多くを占めている³⁾。心不全患者のうち65歳以上が占める割合は68%であり⁵⁾、さらに心不全を有する患者は2030年には130万人に達すると推計されていることから⁶⁾、心不全を有する高齢者が年々増加している状況であると言える。また、心不全増悪により再入院する65歳以上の高齢者は7割を超え¹¹⁾、心不全増悪によって運動耐容能が低下し、高齢者の生活の質も著しく低下することが指摘されている¹⁴⁾。

高齢心不全患者が在宅でより良い心不全コントロールを行うためには、入院中から看護師自身が患者の自己管理上の問題を捉え、その問題に即した対応が求められている。しかし、高齢心不全患者が在宅で自己管理をしていく上での問題を看護師がどのように捉え、その問題に対してどう対応しているのかを明らかにした先行研究はみられていない。そこで本研究は、病棟看護師が高齢心不全患者が在宅で心不全コントロールを行う上での問題をどのように捉え、その問題に対して対応しているのかを明らかにする。

第2章 研究方法

以下の条件を満たす病棟看護師を機縁法にて選定し、21名の協力を得た。条件は①臨床経験が5年目以上の看護師（看護師長、夜勤専従看護師は除いた）、②2年以上、担当看護師として65歳以上の高齢心不全患者の退院支援に関わった経験がある看護師とした。

21名の研究対象者に半構造化面接を実施した。インタビューガイドは、①高齢心不全患者が自己管理をしていく上での問題点、②今まで受け持った高齢心不全患者の退院支援で困難だった点や苦慮したケースの内容とその理由や背景、③困難、苦慮したケースに対してどのように対応したか、または対応しようとしたかについて語ってもらった。

分析には質的記述的研究デザインを用いた。作成した逐語録を熟読し、病棟看護師が捉える高齢心不全患者が在宅で心不全コントロールを行う上での問題と対応について語られている発言に着目して生データを抽出した。抽出した生データから同じ意味内容のものを集め、コード名を付けた後、類似性・共通性・差異について比較検討を繰り返しながらサブカテゴリー、カテゴリー、コアカテゴリー化し抽象度を上げた。その後、問題のカテゴリーと対応のカテゴリーからどの問題に対する対応かを検討し、関連図を作成した。

本研究は、研究者の勤務先である研究倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号:2260)。

第3章 結果

病棟看護師が捉える高齢心不全患者が在宅で心不全コントロールを行う上での問題として、最終的に41のコード、23のサブカテゴリー、8のカテゴリー、4のコアカテゴリーが生成された。高齢心不全患者の問題に対する病棟看護師の対応としては41のコード、19のサブカテゴリー、8のカテゴリー、3のコアカテゴリーが生成された。

第4章 考察

本研究から、病棟看護師は高齢心不全患者が在宅で心不全コントロールを行う上での問題として、【患者・家族の病気そのものへの知識が不足している】、【長年の生活習慣を変え

ることは難しい】や【価値観や人生観から生活を変える気がなく自由に生きたい】と高齢者本人の生き方や長年の習慣化から生活習慣を変えることが難しい、再入院しても治療により症状が軽減する経験や、心臓という目に見えない臓器の病気であることから【また良くなるだろうと病気を楽観視している】、【老いによる変化から自己管理が難しい】や【認知症（認知機能低下）によって自己管理が難しい】と加齢の変化や認知症の発症により自己管理が困難になる、患者本人だけではなく【独居や老々介護、家族のサポート不足から自己管理が難しい】と患者周囲のサポート不足が自宅での心不全コントロールを困難にしている問題であると捉えていることが明らかになった。これらの問題に対して病棟看護師は、患者や家族に心不全に対する正しい知識を獲得してもらうため、病態や治療、生活管理の注意点などをわかりやすく指導していくことや、時には心不全に対する危機感の薄い患者に対し、生活管理の不徹底が重篤な結果をもたらすと認識させ、心不全の重大性を自覚させる介入をしていた。また、高齢心不全患者本人が残りの人生をどのように生きたいか確認し、今までの趣味活動や習慣化している行動は全て制限せず、可能な限り継続できるような代替案を提示するなどの工夫を行っており、成人期の患者とは異なった高齢心不全患者ならではの支援を行っていることが明らかになった。

参考文献

- 1) 内閣府 (2023) : 令和 5 年度高齢社会白書 (全体版), 令和 4 年度高齢化の状況及び高齢社会対策の実施状況, 第 1 章高齢化の状況, 第 1 節高齢化の状況, 2023 年 6 月 24 日, <https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2023/gaiyou/pdf/1s1s.pdf>.
- 2) 内閣府 (2023) : 令和 5 年度高齢社会白書 (全体版), 令和 4 年度高齢化の状況及び高齢社会対策の実施状況, 第 1 章高齢化の状況, 第 2 節高齢期の暮らしの動向, 2023 年 6 月 24 日, https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2023/zenbun/pdf/1s2s_02-1.pdf.
- 3) 厚生労働省 (2022) : 令和 2 年 (2020) 人口動態統計 (確定数) の概況 死因簡単分類別にみた性別死亡数・死亡率 (人口 10 万対), 2022 年 6 月 20 日, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei20/index.html>.
- 4) 厚生労働省 (2022) : 令和 2 年 (2020) 患者調査の概況 傷病分類別にみた施設の種別推計患者数, 2022 年 6 月 20 日, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/20/index.html>.
- 5) Shiba N, Nochioka K, Miura M, et al (2011): Trend of westernization of etiology and clinical characteristics of heart failure patients in Japan -first report from the CHART-2 study-, *Circulation Journal*, 75, 823-833.
- 6) Okura Y, Ramadan MM, Ohno Y, et al (2008): Impending epidemic:future projection of heart failure in Japan to the year 2055, *Circ J* 72, 489-491.
- 7) Shimokawa H, Miura M, Nochioka K, et al (2015): Heart failure as a general pandemic in Asia, *European Journal of Heart Failure*, 17, 884-892.
- 8) Benjamin EJ, Muntner P, Alonso A, et al (2019): Heart Disease and Stroke Statistics-2019 Update-a report from the American Heart Association, *Circulation*, 139, e56-528.
- 9) 坂田泰彦, 後岡広太郎, 下川宏 (2020) : 心不全の疫学 : 心不全パンデミック, *日内会誌*, 109, 186-190.
- 10) 眞茅みゆき, 林亜希子, 宮松直美他 (2020) : 進展ステージ別に理解する心不全看護 (第 1 版), 医学書院, 東京.
- 11) 嶋田誠治, 野田喜寛, 神崎良子他 (2007) : 再入院を繰り返す慢性心不全患者の実態調査と疾患管理, *心臓リハビリテーション* 12 (1), 118-121.
- 12) Tsutsui H, Tsuchihashi-Makaya M, S, et al (2006): Clinical Characteristics and outcome of hospitalized patients with Heart Failure in Japan Rationale and Design of Japanese Cardiac Registry of Heart Failure in Cardiology (JCARE-CARD), *Circulation Journal*, 7, 1617-1623.
- 13) 久保輝明, 黒岩祐太, 岩井彰宏他 (2018) : うっ血性心不全患者の再入院に関連する因子, *理学療法学* 45 (6), 358-365.
- 14) 松岡龍彦, 佐藤幸人, 宮本忠司他 (2007) : 入退院を繰り返す重症慢性心不全患者に対する、外来での点滴治療, *ハートナーシング* 20 (5), 96-101.
- 15) 齋藤文子, 小島重子, 森脇佳美他 (2010) : 慢性心不全患者の重症度に応じた QOL と心機能との関連, *心臓* 42 (6), 754-761.

- 16) 林亜希子, 眞茅みゆき (2016): 心不全患者の自己管理, *Fluid Management Renaissance*, 6 (2), 114-120.
- 17) Setoguchi S, Stevenson LW, Schneeweiss S, (2007): Repeated hospitalizations predict mortality in community population with heart failure, *Am Heart J* 154 (2), 260-266.
- 18) 相川みづ江, 泉キヨ子, 正源寺美穂 (2012): 一般病院に入院中の高齢患者における生活機能の変化に影響する要因, *老年看護学*, 16 (2), 47-56.
- 19) 林陽子, 森本美智子, 神原千比呂他 (2011): 入院患者における自覚症状ならびにストレス認知と心理的状态の関係, *日本看護研究学会雑誌* 34 (2), 49-56.
- 20) Covinsky KE, Pierluissi E, Johnston CB, (2011): Hospitalization -Associated Disability “She Was Probably Able to Ambulate, but I’ m Not Sure”, *JAMA*, 306 (16), 1782-1793.
- 21) 若林秀隆 (2013): 高齢者の廃用症候群の機能予後とリハビリテーション栄養管理, *静脈経腸栄養*, 28 (5), 21-26.
- 22) 公益財団法人日本心臓財団 (2022): 高齢者の心不全, 高齢者の心不全の問題点ーフレイルとサルコペニアー, 2022年6月20日, https://www.jhf.or.jp/check/heart_failure/04/.
- 23) 楠博, 新村健 (2019): 高齢者心不全におけるフレイル、認知機能障害対策, *日本老年医学会雑誌* 56, 107-114.
- 24) 山口晃樹, 平瀬達哉, 小泉徹児他 (2018): 急性期病院におけるフレイルを有する高齢入院患者の特徴, *日本老年医学会雑誌* 55, 124-130.
- 25) 日本循環器学会/日本心不全学会合同ガイドライン (2017): 急性・慢性心不全診療ガイドライン (2017年改訂版).
- 26) 眞茅みゆき (2019): 心不全手帳の改訂ポイントと活用法, *臨床栄養* 134 (4), 478-282.
- 27) Tsuchihashi M, Tsutsui H, Kodama K, et al (2000): Clinical Characteristics and Prognosis of Hospitalized Patients With Congestive Heart Failure -A Study in Fukuoka, Japan-, *Japanese Circulation Journal*, 64, 953-959.
- 28) 佐藤晶子, 百瀬由美子 (2019): 後期高齢心不全患者のセルフケアに対する看護師の支援と困難感の実態, *愛知県立大学看護学部紀要*, 25, 65-75.
- 29) 平野通子, 平田恭子 (2021): 高齢慢性心不全患者の在宅での自己管理の実態と課題に関する文献検討, *ヒューマンケア研究学会誌* 12 (1), 21-28.
- 30) 平田明美, 服部紀子, 青木律子他 (2011): 後期高齢期にある心不全患者の入退院の実態と支援体制, *横浜看護学雑誌*, 4 (1), 99-103.
- 31) 眞茅みゆき, 池亀俊美, 加藤尚子他 (2012): 心不全ケア教本 (第2版), *メディカル・サイエンス・インターナショナル*, 東京.
- 32) 光岡明子, 平田弘美 (2015): 高齢の慢性心不全患者の自己管理に関連した文献検討, *人間看護学研究* 13, 81-91.
- 33) 松本くるみ, 今井多樹子, 高瀬美由紀 (2019): 慢性心不全患者が直面する自己管理上の課題, *日本職業・災害医学会会誌* 67 (3), 199-205.

- 34) 光岡明子, 平田弘美 (2019): 後期高齢期にある NYHA I ~ II 度の慢性心不全患者の自己管理継続の要因, 人間看護学研究 17, 1-14.
- 35) 岡野佑子, 坂本早紀, 小野萌梨他 (2016): 慢性心不全をもつ高齢者のセルフマネジメントー自分らしい生活を送るプロセスー, 高知女子大学看護学会誌 41 (2), 97-105.
- 36) 山中智尋, 杉田綾乃, 溝渕千帆他 (2018): 慢性心不全をもつ高齢者がセルフモニタリングを形成していくプロセス, 高知女子大学看護学会誌 44 (1), 156-165.
- 37) Rerkluenrit J, Panpakdee O, Malathum P, et al (2008): Self-Care among Thai People with Heart Failure, Thai J Nurs Res, 13(1), 43-54.
- 38) 吉川勉 (2005): 再入院を繰り返す重症心不全患者の治療戦略, 循環器科, 58, 323-329.
- 39) 永野裕花, 末広美菜, 岡村美咲他 (2017): 慢性心不全をもつ高齢者の生活調整を支える看護ケア, 高知女子大学看護学会誌 42 (2), 87-96.
- 40) 富田ゆり子, 湯浅美千代, 島田広美 (2021): 急性増悪により入院した高齢慢性心不全患者の自己管理に向け病棟看護師が行う支援方法, 医療看護研究 17 (2), 51-60.
- 41) 大津美香, 森山美知子, 眞茅みゆき (2013): 認知症を有する高齢慢性心不全患者の再入院の要因と在宅療養に向けた疾病管理の実態, 日本循環器看護学会誌 8 (2), 35-46.
- 42) 山下亮子, 増島麻里子, 眞嶋朋子 (2011): 慢性心不全患者の症状悪化予防に関する生活調整, 千葉看護学会会誌 16 (2), 45-53.
- 43) Benner, P. (1984) / 井部俊子 (2005): ベナー看護論新訳版-初心者から達人へ (第 1 版), 医学書院, 東京.
- 44) 正木治恵, 真田弘美, 井出訓他 (2016): 老年看護学概論「老いを生きる」を支えることとは (改訂第 2 版), 南江堂, 東京.
- 45) 信岡由夏, 鷹林広美, 徳満久美子他 (2007): 高齢の心不全患者の生活上の問題-再入院患者の調査より-, 日本看護学会論文集, 老年看護, 37, 100-102.
- 46) 出井はるか (2020): 高齢慢性心不全患者のセルフケア支援の構成要素-イーミックの解釈分析を用いて-, 鳥取生十字医誌, 29, 41-45.
- 47) 厚生労働省 (2019): 国民生活基礎調査の概況, IV 介護の状況, 2023 年 6 月 29 日, <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa19/dl/05.pdf>.
- 48) 浅井恵理, 梅津美香 (2019): 高齢慢性心不全患者の望む生活を実現する看護のあり方, 岐阜県立看護大学紀要 19 (1), 15-26.
- 49) Yokoyama T, Vaca L, Rossen RD, et al (1993): Cellular basis for the negative inotropic effects of tumor necrosis factor-alpha in the adult mammalian heart, J Clin Invest, 92(5), 2303-2312.
- 50) 黒澤佳代子, 池田清子, 河村麻佐子他 (2016): 急性期病院の病棟看護師が行う退院支援の現状-がん、慢性疾患の違いに焦点をあてて-, 神戸市看護大学紀要 20, 69-77.
- 51) 洞内志湖, 丸岡直子, 伴真由美他 (2009): 病院に勤務する看護師の退院調整活動の実態と課題, 石川看護雑誌 6, 59-66.
- 52) 一般社団法人日本心不全学会: 心不全手帳第 3 版発行にあたって, 2023 年 7 月 25 日, <http://www.asas.or.jp/jhfs/topics/shinhuzentecho.html>.
- 53) 津之下真海, 小林平, 門内美鈴他 (2021): 心不全患者に対する生活指導の看護師意

識調査, 日本農村医学会雑誌 69 (6), 628-633.

54) Becker MH, Drachman RH, Kirscht JP, (1974) : A new approach to explaining sick-role behavior in low-income populations, Am J Public Health, 64, 205-216.

55) Becker MH, (1974) : The Health belief model and personal health behavior, Health Educ Monogr, 2, 409-419.

56) Rosenstock IM, Strecher VJ, Becker MH, (1988) : Social learning theory and the health belief model, Health Educ Q, 15, 175-183.

57) Glanz K, Rimer BK, Viswanath K, 編集 (木原雅子, 加治正行, 木原正博訳)
(2018) : 健康行動学-その理論、研究、実践の最新動向, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 東京.

58) 村上礼子, 鈴木美津枝, 鹿村眞理子他 (2009) : 地域生活を継続している慢性心不全患者のセルフケア-外来患者のセルフケア影響要因に注目して-, 獨協医科大学看護学部紀要, 3, 1-10.

59) 蓬田淳 (2017) : 緊急入院となった急性心不全患者における重症性の主観的評価に関連する要因, 日本救急看護学会雑誌 20 (1), 20-28.

60) 田口ますみ, 原祥子, 小野光美他 (2017) : 認知症を有する高齢慢性心不全患者の家族がとらえる心不全増悪徴候, 老年看護学 21 (2), 42-50.

61) 殿岡真夕子, 池田貴美江, 景山ミサエ他 (2016) : 外来患者における慢性心不全患者の自己管理支援, 松江市立病院医学雑誌 20 (1), 11-18.

62) 佐藤紀子 (2004) : 家族のケア力を高める看護援助に関する研究, 千葉看護学会会誌 10 (1), 1-9.